
黒蝶の後継

灯籠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒蝶の後継

【Nコード】

N4531C

【作者名】

灯籠

【あらすじ】

垂氷家に生まれたが故に黒蝶という、悲しい役目を生まれながらに背負っている半神半人の娘の物語。

登場人物および説明（前書き）

少々、グロい描写があるかも知れないので、そういうのが苦手な方は読むのを控えてください。

登場人物および説明

〔登場人物および解説〕

神王
しんおう

神々を統べる者。唯一魔王に逆らうことができる。

神無月
かんなつき

神王補佐の役職名。

黒蝶暗殺事件により、神王が信頼の置ける者が務めるようになった。
魔王
まおう

魔族を統べる者。唯一神王に逆らうことができる。

菟場
あづは

魔王補佐の役職名。

黒蝶
こくちょう

別名、月翳りの兇手とも言われる。

垂氷家の黒か黒に近い色の蝶をその身に宿すもの。

生粋の兇手。

垂氷家
たるひけ

上流貴族の一つ。

古来より蝶を宿した女が当主を務める。

黒南風家
くろはえけ

上流貴族の一つ。代々魔王を務めてきた家系。

古来より男児は龍を宿すように龍にちなんだ字が名に使われる。

甘露家
かんろけ

縁盟界の王族の総姓

氷楼家
ひょうろうけ

下流貴族の一つ。命知らずにも、神王位と魔王位を狙い兇手を送り込むが返り討ちに会い滅亡する。

縁盟界
えんめいかい

21代目魔王夫妻と神王夫妻が建てた界

縁盟界王えんめいかいおう

甘露家の者から選ばれる。

修行しゅぎょう

王族や上流貴族の子が人界に下されること。

雨龍は皆殺しにし兼ねないため命の山になった。

仙界せんかい

普通の人間は入ることが出来ない場所。

半人はんじん

半神半人と半人半魔の略称。

甜洊茶てんえん

とても甘い茶。人間には苦い。

憂蝶ういちょう

甕兎榎の別名。最高占い師の名

甘露緋椿かんろ ひつう

前神王。銘菟の夫。壊龍とは、喧嘩するほど仲がいいという仲。

黒南風壊龍くろはえかい りゅう

前魔王。夢の夫。緋椿とは、喧嘩するほど仲がいいという仲。

霧雨秋姫きりさめ あき

甘露家三女で現神王。不本意だが雨龍の妻。神王だが幼少時代から

少女時代まで魔法が得意であった。得意なのは水属性の魔法と神法

全般。

黒南風雨龍くろはえりゅう

黒南風家長男で現魔王。秋姫の夫。青年期は鬼畜王で有名だった。

得意なのは水属性の神法と魔法全般。

黒南風桜くろなづけ とう

黒南風家長女だが魔法が使えなかったので兄弟に迷惑がかかるから

と家出をした。が命の山での雨龍との約束を果たすため縁盟界へ戻

ってきた。

甘露銘菟かんろめいしゅう

前縁盟界王。緋椿の妻。前甘露家当主。女性なのに男勝りで浮気者。

くろはえはかな
黒南風儚

前界王補佐。壊龍の妻。前黒南風家当主。女性らしく優しいが怒ると怖い。

はくろききょう
白露桔梗・・・研究熱心で妹思いだが、短気なところがある。幼名：

甘露桔梗

つばきこはる
椿小春・・・天然でキラキラ好きで人を苛めるのが大好き。たまに桔梗に無視される。

幼名：甘露小春

霧雨秋姫・・・幼名：甘露秋姫

しぐれひょうか
時雨氷華・・・現界王。刀の名手。流されて樟の妻。得意なのは氷属性の魔法と炎属性の神法。秋姫が大好きで、ちよっとシスコン。

幼名：甘露氷華

現界王補佐・・・黒南風樟 黒南風家次男。氷華の夫。得意

なのは炎属性の神法と氷属性の魔法。キレると、手がつけられない五ノ姫・・・白南風甕兎榎しら はえ うつか 人界での名は霞菟束。現東ノ国国王。得意とするのは先見と占い。修行中の国では憂蝶という名が与えられていた。

さゆかいし
月牙海市・・・正体不明。甕兎榎の夫。甕兎榎をとて慕っている反面、守らなくてはと思っている。

1代目黒蝶・・・垂氷慧莠たるひけい ゆりん 愛称は薇莠みゆ。弟子が秋姫以外に5人いて皆仙界守護者にした。今は亡き炯香の母。

2代目黒蝶・・・垂氷炯香たるひけい か 薇莠の長女。

あかつきかい
朱兎界（隠居した神王夫婦と魔王夫婦のための界）

暁ノ国

えいや
穎弥が国王を務める国。

西ノ国

炯香が治めていた亡国。

みなみのくに
南ノ国

紗代が国王を務める国。

いのちのちやま
命の山

一年中桜が咲いていて枯れることの無い山。

遥雫（女仙）が守っている。

女仙

仙界にただで別に仙人ではないが山の守護者である。

遥雫

秋姫より、3才年上だが、弟子としては、同期。命の山の守護者。

元捨て子。

魔法・魔術

魔族が得意とする術

神法・法術

神族が得意とする術

琴李・・・人界の少女。幼い頃母を亡くし、放浪していたところを

紗代に拾われる。

その際神に祈っても聞き入れてくれなかったため神を信じていない。
箔・・・天才だが少々抜けていて、天然な少年。趣味で色々やって
いたらしく王族のたしなみは殆ど完璧に出来るらしい。

紗代・・・南の国の女王。とても気弱で寂しがりや。

奨霖・・・実は雨龍を知っているその理由は本編を・・・。

（秋姫の臣下）

黒華・・・秋姫の臣下の中ではまとめ役。しっかり者だが敵や、弱
いものいじめをする奴らには容赦ない。短気ですぐ怒りなかなか冷
めない。

遠雷・・・風華の兄。秋姫曰く気難しいグループのギリギリライン。

自分が認めていない奴と妹を泣かせる奴とは、口も聞かない。

葬焚・・・優しいが、冷酷で言葉遣いも普段は良くないが割り切つ
ている。

自分の認めた匂香から離れる気は無いようす。

風華・・・遠雷の妹。穏やかな性格で心優しい少女。

雪嵐・・・気難しい性格でよく話をはぐらかす。匂香と葬焚が大好
きで言うことをきく。自分より幼い少女は小娘と呼ぶ。しかし、匂

香は別。

白華しらはな・ ・ ・ 黒華の妹すごい人見知り。

春嵐しゅんらん・ ・ ・ 雪嵐の妹。すごいスコンですぐ泣く。

木綿こわた・ ・ ・ 最悪なくらい気難しい。雨龍の分身のような奴。

登場人物および説明（後書き）

まだ、設定のみなので、これから更新していきます。

次は本文に入る予定なので、よろしかったら読んでいただけると光栄です。

灯籠

第一章：言語改正（其の一）（前書き）

この章はそれほどではありませんがグロイ描写ととれるものがあるかもしれないので、苦手な方は読むのをお控えください。

第一章：言語改正（其の一）

ここは、異国のもの同士が殺しあうような悲しみの絶えない・・・
争いの絶えない世界。

「危ない！後ろー！」

「えっ？」

カンッ

「よそ見していると死ぬぞー！」

「そんなへまはしねえよー！！失礼だな！」

「二人とも喧嘩してる暇あったら1匹でも多くの敵を倒しなよー！

！」

「分かったよ琴李。」

「ほら来た。」

「私に任せろ！」

「我が剣に宿りし炎の力よ我の行く手を阻むものを倒したまえ！」

ポッ

四方にいた敵が焼け死んでいく・・・

「これで最後？」

「ああ。」

「あー嫌な景色、見渡す限り、人の死体って・・・。」

「仕方ない、私達はこの人間達を始末しなきゃいけなかったんだ。」

「俺も同感だ・・・。」

「僕も・・・。」

「神様って残酷だよね、箔。」

「神なんて信じてるのか？琴李。」

「まさか・・・。」

「神を信じて、神に忠誠を誓う人間共を憐れんでいるんだよな？琴李。」

「まあ・・・ね。炯香。」

「皆さんもう城へ帰りましょう。」

「うん！」

「ああ。」

「こんなトコ1分でも長く居たくない……。」

〔南楼城〕

「ただいま戻りました……陛下。」

「ご苦労様……陛下はやめて、もうこの城には私達しか居ないのだから……。」

「では、お言葉に甘えて……紗代さん。」

「紗代でいい、紗代で……。」

「紗代……。」

「うん。そうそう……。」

「他のものは？」

「紗代……。」

「紗代……さん。」

「紗代……。」

「うん！それでいいわ、後は敬語もやめて頂戴……そうそう次の戦いからは私も戦陣に赴く事にしたわ、だからこれから宜しく。」

「……えっ？」

「あの……紗代さん……その口調ではすぐに貴女が王である事がばれてしまいます。」

「そうよ！紗代！炯香くらい性格悪そうな口調じゃないと……。」

「ちよつと琴李それどういうこと？」

「そのままの意味だよね奨霖？。」

「ああ……。」

第一章：言語改正（其の一）（後書き）

誤字、脱字が多いかもしれませんが、お許しください。

灯籠

第一章：言語改正（其の二）

「僕も炯香さんなら男装すれば女とは絶対ばれない……と思います。」

「箔まで……！ひどいじゃないか……。」

「ほらっその口調がいけないんだって！」

「うっ……。」

「あのお……皆さん私にあの口調で話せとそういうことですか？
「うん！」

「自っ自信がありませんっつっ！」

「まあ元、姫じゃあ仕方ないが……剣は使えるか？」

「少々なら……。」

「人は斬った事あるのか？」

「いえ……ないです。」

「なら、やはり口調は直すべきだと思うが。」

「しかし、そうしたら……誰が紗代のフリをするの？」

「剣で一番強い奴だな……。」

「性格悪……うっ……。」

「やはりここは、そこでブツブツ一人悲しみにふけっている炯香！
「はっはい？」

「お前、その口調なんとかしろ……！」

「え？……うん！がんばる！で、どっいう口調にすればいいんだ？。」

「丁寧な口調だよ！炯香！」

「無理だ！そういうのはお前がやればいいじゃないか！琴李。」

「琴李さんは剣術強くないからだめなんです……頑張ってください
い炯香さん……。」

「っだーわかったよ。やればいいんだろやれば……！」

「そういうこと。」

「よろしくね！炯香。」

「ああ、わかったよ……じゃなかった。分かりました……。」

「あーあ先が思いやられる……。」

「それを言わないで下さい……。」

「で？これからどうするんだ？紗代。」

「出来れば、東の国に渡って国王に会いたいのですが……国境には暁ノ国の追っ手がいるから……貴方たちは無事にたどり着けるでしょうけど……私はきつと無理……ね。」

「何のための囧だと思っているの？紗代。」

「えっ囧？なんですかそれは……琴李。」

「わーひどいですわ、なんのために私が言語改正しろって言われているのか分からないとおっしゃるのですね……。」

「おっ炯香！なかなかやるじゃないか！」

「当然です！私にかかれば言語改正なんて朝飯前ですわ！」

「紗代は朝飯前なんて下品な言葉いわないと思うよ！ねえ箔？」

「そうですね……おそらくは朝ごはん前と言っんじゃないでしょうか。」

「ってそういう違いかよ……！」

「なんかおかしいこと言いました？僕。」

「お前頭脳明晰、武道もそこそこののに……なんでそういうことは天然なんだ？」

「箔、私は朝ごはん前とも言わないぞ！」

「おっ紗代もなかなかやるな！」

「……。」

「じゃあなんて言っんですか？お朝ごはん前？……それともお朝ごはん前？」

「だーかーらそういう意味じゃないって！」

「へ？」

「紗代はそんな言葉はいわないできつと（ありがとうございます。）って言うっていったの……！」

「何で怒ってるんですか？琴李？」

「もーいいよ！」

「へ？・・・」

第一章：言語改正（其の二）（後書き）

文才なくて本当にすいません。

読んでいただけて光栄です。

なるべく、早く更新しようとおもっています。

灯籠

第二章：炯香の正体（其の一）

「紗代！分かったら早く東ノ国に文をだして国境で待ち構えている奴らを騙せ！」

「うっうん！」

「あつ紗代！紗代の得意なことを炯香に伝えといて！」

「？・・・分かりました！」

「えー他にもやんなきゃいけないの？」

「炯香つ言語！」

「は、はいつ。」

「私の得意な事ですね。お琴、お華、お茶、それから・・・笛、琵琶、位でしょうか・・・」

「すごいっ！すごい！さすが紗代っ。」

「僕も琴は出来ないな。」

「えー他全部出来るの？」

「その位は嗜んでいます。」

「じゃあ今度教えて！」

「いいですよ。」

「やったー」

「だ、そうだがどうするつもりだ？炯香。」

「逆に苦手なものは？」

「弓だけです。」

「それなら何とかありますわ。」

「えっ？炯香、琴、華、お茶、笛、琵琶全部出来るの？」

「ええ、嗜む程度には、もちろん弓もできますよ。」

「え？嘘でしょう？」

「琴李、箔、お前たちこいつが・・・何者なのか知らないのか？」

「こいつは・・・」

「言っな！子供に教えてやる必要はない！」

「子供って！ひどいですっ。」

「そうよ、私達だけ仲間はずれなんて！」

「あのーすいません私も知りませんが・・・。」

「国王陛下には言っておくべきなのではないか？」

「・・・。」

「お言いなさい！これから仲間として一緒にすごすのですよー！」

「わかった言いましょう・・・しかしそれを聞いたからといって態度が変わったら承知しませんよ！」

「分かっています。」

第二章：炯香の正体（其の二）

「私は、今は滅びた西の国の王なのです。」

「え？王様？」

「あの、この国の王族の遠い親戚の？」

「つてことは通り名は紗羅様？」

「だから態度を変えないで下さいませ、それとその名で呼ばないで下さい。」

「じゃあ今までどおり、炯香、と呼ばせていただきます」

「数々のご無礼謝罪いたします。」

「いまは王といっても何の価値もない人間よ。」

「ですが・・・」

「それと貴女は国王なのですよ、ペコペコ人に頭を下げてはなりません。」

「民の居ない王が何の価値があるのですか！！！」

「私達は貴女の民ですよ。それに、どうやら貴女は民が全て死んでしまったと思っているようですが、ほとんどの民は私が非難させましたから。」

「さすが炯香！」

「では、明朝出発致しましょう。」

「そうですね。」

「じゃあ僕はもう遅いので寝ます。」

「おやすみなさい箔、琴李ももう寝たら？」

「俺も自室に戻るとしよう・・・。」

「奨霖がいらないならねう・・・」（つまんないし）

二人はそれぞれの室に戻っていった

「・・・。」

「・・・。」

「紗羅様・・・」

「ごめんなさい、騙してたようなことになってしまつて・・・。」

「いいえ、貴女が無事だったという事で十分ですよ・・・。」

「それに謝らなければならぬのは私のほうです貴女の国が滅びかかっているときに・・・何もして差し上げられなかった・・・。」

「そんなに気にすることはいいです・・・我が国の、いえ、私の力不足だったのですから」

「そういつていただけると少しは気が楽です・・・ありがとうございます。」

「貴女とかかわってしまった以上、私は全力で貴女を護衛します・・・。」

「そんな・・・恐れ多い・・・です。」

「この国、いえ、この世界を救つてくれそんな貴女を死なせるわけにはいきません。」

「やはり貴女は薇莠様に似ていらつしやる・・・気高い魂の持ち主でいらつしやるのですね・・・。」

「・・・。。。」

「出過ぎたまねをいたしました・・・申し訳ございません・・・。」

「いいえ・・・それより今日はもう遅いですし私は先に失礼します・・・。」

「おやすみなさい。」

「ええ、また明日・・・。」

そついうと炯香は室に戻つていった・・・

第二章：炯香の正体（其の二）（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

よろしければ、感想などいただけるととても嬉しいです。

灯籠

第二章：炯香の正体（其の二）

「炯香の室」

（本当にアレで紗枝殿の娘か？・・・幻覚じゃないのか？）

「本当に紗枝君の娘だよ・・・その証拠に父上にも少し似ている・・・」

（で？お前、囀を引き受ける気か？）

「じゃなかったら徹夜して弛緩剤とか睡眠薬とか作るわけないだろう？」

（それもそうだな・・・でもお前、どうやって飲ませる気だ？）

「たぶん紗代であるか調べるために、料理を作らされると思う、その中に仕込むんだよ」

（毒味させられて自分で飲んで終わりじゃないのか？）

「だから解毒薬も作ってるんだよ！」

（そっちのゴポゴポ言ってるほうか？）

「そうだよ、飲んでから出発すれば即効性じゃないから2日間は大丈夫！」

（さすが、とでも言おうか？）

「そんな言葉はいらんから少しは手伝え！」

（無理だ！私は犬だぞ！）

「はあ？いまさら何言ってるの？人化すればいいじゃん。」

（ちっ、気付きやがったか・・・）

ボンッ

「何か言ったか？」

「いや、別に？」

「おいおい。その姿のとき言葉遣い直しなよ！」

「いいじゃん、別に」

「良くないよ、お前の言葉遣いがうつるだろ？」

「そーいえばお前が捕らえられてるとき私はどうすればいい？」

「あ、話そらしたな？・・・牢番にでも化けていれればいいじゃん！」
「了解！」

「よっしゃっ！出来たー」

「じゃあ寝ろ」

「今何時だと思ってる？」

「大丈夫起こしてやるから」

「じゃあお言葉に甘えて・・・おやすみー」

第二章：炯香の正体（其の二）（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

灯籠

第三章：出発の準備（其の一）

「次の日の朝」

「おはよう炯香、起きねえと布団ごと吹っ飛ばすぞ？」

「え？ 葬？ ふあゝおはよう・・・お休みなさい・・・」

「こら！ 起きろ！ 寝んな！ おい！」

バシッ

「ついたー何すんのよ！」

「お前が起きねえからだろ！」

「はっ！ 今何時？・・・あー良かった10分前か・・・」

「さっさと行け！ みんなが待ってるぞ！」

シュンッ

そついうと葬は犬の姿に戻った・・・

「はい、はい」

（・・・・・・）

「じゃ行こっか？」

（ああ。）

そついうと2人は室を後にした・・・

「広間」

「遅かったねえ炯香」

「はい、少々寝坊してしまつて・・・」

「炯香でも寝坊するんだ・・・」

「私だって人間ですよ・・・琴李」

「それにしても目の下にくまが出来てるぞ・・・？」

（・・・バカ！！・・・）

「あら、嫌だわ・・・気のせいよ・・・」

「本当だ・・・僕にも見えますよ・・・」

「さては炯香昨日、夜更かししたね？」

「・・・・・・」

「とにかく、睡眠は必要だ！！寝て来いあと5時間は寝ていて平気だ！」

（おい、コイツ一度寝たらおきねーぞ？）

「……………」（あとで覚えてろよ！薙）

「そうですよ朝食を取ったら少し寝なさいな」

「ですが……………」

「これは国王命令です！」

「う……………はっはい……………」

（国王・命令・ね……………）

「では、食事にしましょう……………」

そういうと紗代はすつと席に着いた……………

「さあ皆さんもどうぞ……………」

その言葉を境にみなが席に着く

「いただきます……………」

数分後……………

「ご馳走様でした」

そう言うのと炆香が席を立った

第三章・出発の準備（其の一）（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

そして、更新遅くなってしまってますいません。

灯籠

第三章：出発の準備（其ノ二）

「炯香・・・どこへ行くつもりですか？」

「え？・・・」

「室に戻って寝なさいといったばかりでしょうに・・・」

「え？いやだなあ・・・室に戻るんですよ・・・」

「嘘を仰いますな・・・」

「・・・」

「おまえの室はいつ門の近くになつたのだ？」

（・・・お前の負けだあきらめろ・・・）

「はい・・・すみませんでした・・・」

「分かつたなら良いのです・・・早くお休みになつてください」

「・・・御意・・・」

そついうと炯香は渋々室に戻つていった・・・

「ちゃんと寝てくださるかしら？」

「大丈夫でしょう・・・一服盛つておいたので・・・」

「そろそろ効いてくるのでは？」

「あの・・・何がです？」

「紗代知らないの？睡眠薬ですよ・・・」

「ああ、つて・・・え！」

その頃炯香は・・・

「あーもう、寝る寝ろつたつて無理だし、心配で・・・」

（また起こしてやるから・・・寝とけ！）

「いやだね・・・」

フラッ・・・

「なんか急に体が重くなつてきた・・・なんでだ？」

（本当は眠いんだよ・・・きつと）

「うわっ目が開かない・・・」

（だから寝とけて・・・）

「いやだ！い・・・や・・・だ・・・」

スースー

（あ、寝た・・・ったく気付けよな・・・睡眠薬盛られたんだよ・・・）

（数時間後）

「寝てしまったのか？なにやら妙な夢を見たような・・・」

（そりやもう、ぐっすりと）

「おい！今何時だ？」

（１時３０分になるな・・・）

コンコン

第三章・出発の準備（其ノ二）（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

更新が遅れてしまったことお詫び申し上げます。

灯籠

第三章：作戦実行（其の一）（前書き）

やっと物語が動き出すように思います。
今回はグロイ表現はないと思います。

第三章：作戦実行（其の一）

コンコン

「炯香そろそろ起きて下さい。」

「はい、もう少ししたら広間に向かいます・・・」

「はい、ではお待ちしています・・・」

「さて、これ飲んだら、行くか・・・計画通り頼んだぞ・・・」

（了解！）

薨の言葉を聞き終えると、炯香は昨晚調合した薬を一気に飲み干し、室を出て広間に向かった・・・

「効いたみたいだね？」

その言葉を聞くなり、炯香がプルプルと震えだした

「お前またやつたな、琴李！！！」

「私だけじゃないもん！ね？」

箔と奨霖が深く頷いた

「お前らも仲間かぁー！！！」

「落ち着け！炯香」

「ふえ？すいません、紗代」

「おー気合入ってるねー紗代！」

「ふんっ」

「その冷酷さ、それこそ炯香さんです！！！！」

「私はあるなに冷たいか？奨霖」

「まあ、そっくりだな・・・」

ガン

「炯香も頑張れ・・・」

「そうですよ・・・」

「そんなあ傷をえぐらなくてもよろしいではないですか・・・」

「さて、準備はよろしいか？」

「はい！」

「はい！」

「・・・はい。」

「はい！」

「じゃあ出発するぞ・・・計画通りに・・・」

その言葉を最後に紗代たちは城をあとにした・・・

（国境）

「その南ノ国の王様一行さんよあ？」

「ちよつと我が国へ来てもらうぜ！」

「ふんっ外道が・・・。」

そついうと熒霖は剣の柄に手をかけた・・・

「安心しなつ連れて行くのはその姫さんだけさ！！！」

そついうと敵国の兵たちは炆香を捕まえた

「いやー！離してー！やめてー！」

（おい！棒読みだぞ・・・）

「返してほしかったら、暁ノ国、暁香稜殿までくるんだな！」

「疾っ」

剣を抜いて襲い掛かる

敵はそれを避け、踵を返して、行つてしまった・・・

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「行つたか？」

「行つたね・・・。」

「呆気なかったですね？」

「ああ、・・・さて行くか・・・。」

そついうと一行は東の国へ向かつた

第三章：作戦実行（其の一）（後書き）

はじめまして又はお久しぶりです、なかなか更新できなくてすみません月の変わり目はどうも忙しいですね・・・。
読んで頂きありがとうございます。

これからは早く更新していきたいと思います。
それでは、風邪などひかないように気をつけてお過ごしくださいませ。

灯籠

第四章：囚われの姫（其の一）（前書き）

炯香がついに帝のもとへ連れて行かれます。

第四章：囚われの姫（其の一）

一方その頃炯香はもう暁香稜殿についていて今まさに牢に放り込まれるところだった。

「私をどうするつもりですか？」

「さあな・・それは帝にしかわからぬ・・・な。」

「帝からの使いが来たぞ！！！」

その声とともに一人の男が入ってきた・・・

「おお、なんとも雅な・・・」

そういうと炯香の髪に触れた

「触らないでいただきたい！」

「矜持も高いと見える・・・帝が気に入るわけだな」

炯香が睨みつけた

「そんな怖い顔をしないで下さい。可愛い顔が台無しですよ・・・」

そんな言葉は聞きなれている炯香はお構いなしに睨み続ける

「さて琴と華、茶、笛、仁湖、琵琶が出来るらしいな・・・」

「はい。」

「今から全部やってもらう・・・お前が本当の紗代帝だったら易く出来るだろ？」

「はい。」

「じゃあまずは琴だ・・・ほれ、やってみい。」

そういうと琴が出てきた

その琴を迷いなく炯香が爪弾く

「次に華」

「次は茶」

「次は笛」

「次は二湖」

「次は琵琶」

すべてが終わった・・・

「どうやら本人らしいな・・・」

実は本人より上手なのだがそれを知るは、滅びた西ノ国の者だけだ
ろっ・・・

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

「帝のもとへ連れて行け！」

「御意。」

そう男が言つと炯香は牛車に乗せられた

牛車の中は整備されておらず、がたがたしてとても乗り心地がいい
とはいえなかった。

仕方なく、我慢して牛車に揺られること数十分・・・

第四章：囚われの姫（其の二）（後書き）

読んで頂き光栄です。
それでは、また。

灯籠

第四章：囚われの姫（其の二）（前書き）

ついに紗代ではないことが帝にばれますが、この帝が結構変わって
いて・・・？

第四章：囚われの姫（其の二）

「帝、南ノ国の帝殿を連れてまいりました・・・」

「入るがよい・・・。」

その声を聞き終えると炯香は帝の前へ突き出された

「では、私共は下がらせていただきます。」

そついうと家臣達は室をあとにした

「よく来たな南ノ国ノ王よ。」

「何を仰いますか、貴方様がお攫いになられたのでしょうか？」

「はは、そうだったな・・・」

「・・・。。。」

「表を上げよ。」

「・・・はい。」

「なっ！」

「どうかなさいましたか？」

「お前、私を覚えていないのか？」

「はい？私に他国の知り合いなど居りませんが？」（そつえばなんが見覚えがあるような・・・）

「痛かったのだぞ！炯香」

「炯香？どなたですか？」（なんで名前を知っているのかしら）

「とぼけるなお前、私の頬をひっぱたいてくれただろう」

「・・・あ！まさかあの穎弥か？」

「そつだ、でも確か南ノ国ノ王は紗代殿じゃなかったのか？」

「そつですよ？」

「じゃあ何故お前がここにいる？」

「さあ？あなたの家臣が紗代と間違えたのでは？」

「まあ同じ王族だから品はいいし矜持が高いから無理はないが・・・。」

「が？」

「逢瀬の約束をした男を殴ってそのまま振り向きもせず帰るような奴とどうやったら間違えるのかと・・・。」

「ああ、それは私が珍しくおとなしくしていて、紗代が暴れていたからじゃないのか？」

「ほう、・・・それに顔が似ているのか？」

「まあ、従妹だしな」

（おいおい、この帝バカだろう、普通偽者だと分ったら怒るだろう）

（私はコイツの初恋の人なんだ）

第四章：囚われの姫（其の二）（後書き）

今回はギャグっぽくなってしまいました。
更新が遅くなって本当にすいません。

灯籠

第四章：囚われの姫（其ノ三）

「まあ、いいやお前に会えただけで嬉しい・・・。」

（やつぱりバカだ・・・それも手のつけようのない）

「そりゃどーも、でもいいのか？紗代はきつともう東ノ国についているぞ・・・。」

「いいのだ・・・ひさしぶりにお前に会えたしな・・・。」
「・・・。」

（もう何も言うまい）

「それに、紗代殿をさらおうとしたのはお前に似ていたからなのだ。」

「言っておくがお前の妃にはならないぞ？」

「なんでだ！」

「いい加減私離れをしてくれよ、先ほど、家臣達が嘆いていたぞ帝が誰も娶らないと」

「誰も娶る気はない・・・。」

「妾妃もか？」

「もちろん。」

「お前は私の顔がいいのか？」

「違う！」

「ならば、なぜ紗代を？」

「・・・顔が似ているからお前の親戚だと思ったのだ・・・だから・・・紗代殿をさらえばお前が助けにくるか・・・お前は強いから。」

（まあ間違っではないが・・・）

「飽きれて怒る気もうせるわ！！！」

「でも、こうして私の前にはいるじゃないか？」

「うつ」（それを言われるとなんとも言えん・・・。）

（馬鹿に一本とられたな）

「私はお前意外の女を娶る気はない・・・だから・・・どうか私の妃になつてくれ・・・」

「嫌だ！」

「そんな・・・」

「泣くな！少しの間・・・私の仲間が来るまでは側にいてやるから」

「うう・・・はい」（やったあ・・・）

「まさかお前が暁ノ国ノ王だったとは思わなかったよ・・・」

「ああ、あのときは西ノ国に母上と遊びに行っていたときにはぐれたから・・・」

「だから泣いていたのか・・・」（泣かれると弱いんだよ）

「むう・・・わるいか？」

「べつに悪くないよ・・・」

「・・・」

「もし、もしもだお前が紗代をさらわないで、この国いや、南ノ国と暁ノ国が平和で、私が生きていて、暇で暇でつい毎日樂を奏でるようなそんな日がきたらそのときは・・・」

炯香の目から涙が頬を伝っている・・・

「そのときは？」

「お前の妃になつてやってもいいよ・・・」

第四章：囚われの姫（其ノ三）（後書き）

読んで頂きありがとうございます。
更新遅くなってすいません。

灯籠

第四章囚われの姫（其の四）（前書き）

本当に遅くなってしまうてすいません
飽きずに読んでいただけたら光栄です。

第四章囚われの姫（其の四）

「本当か？」

「ああ。」

「やったー！」

炯香はそんな無邪気な穎弥を見て笑った

（コイツが笑うなんて・・・）

「あ、でも、もしかしたら気が変わるかもしれないからやっぱり毎月会いにいく！！！」

「はあ・・・。」

「なるべく早く妃になって欲しいから・・・。」

「ならば・・・剣で私に勝てたらにするか？」

「2つにしてくれ。」

「いいよ？」

「どっちかひとつが叶ったら妃になってくれ。」

「・・・うん。」

「よし！がんばるぞー」

そういうと王は室を出て行った

「おい、そこなものの剣で手合わせ願う。」

「そんな・・・帝！！！」

「わぁー帝が剣の妖にとり憑かれたぁー！」

そんな声が聞こえてくる

「ふふふ。」

（炯香？）

「心優しい人でしょう？」

（ああ、バカだがな）

「そう、いつまでも、子供の様に心が綺麗なの・・・私には決してないもの・・・」

（王族に生まれながら、珍しい者ではあるな）

「だから怖くも愛しくもあるの、私には勇気が足りないのね・・・」
（人は皆そうさ、楽な関係を壊したからない。）

「そう今の関係が一番楽、でもいつまでも逃げてちゃダメ・・・ね」
（白黒はつきりしてやった方が良好だろういつかは、まあその結果はあのバカの行動しだいだな？）

「そうね、小母さんになる前までには決着をつけなくちゃ」

「おい炯香、私に剣の稽古をしてくれ！」

（ほら、バカ帝がおよびだぞ！）

「ふふふ。」

「おい、炯香？」

「いいよ！」

（・・・でもこういうやつに限って押しかけ女房みたいな奴がいるんじゃないのか？）

そんなことを考えていると・・・

第四章囚われの姫（其の四）（後書き）

はじめましての方も、お久しぶりですの方も
読んでくださりありがとうございます。
続きも是非読んでください。

灯籠

第五章：押しかけ女房（其の一）

どこからか「帝 何処にいらっしゃるの？」という声が響いた

（言わんこつぢやない・・・）

「帝、炯香様・・・あの、お客様がいらっしゃっています・・・」
「誰だ？」

「近衛花音様です・・・」
「げっ・・・」

「は？どんな方ですか？花音様とは・・・」

「この国一の美女で帝が3年前転んだ花音様にお声を掛けたところ、
一目ぼれしたらしく・・・それはもう毎日宮中で働いているお父上
様に会いに来るついでとか言って帝を追い掛け回している・・・俗
に言う『押しかけ女房』ですね・・・」

「ほう・・・それは、それは・・・あれ？帝？」

「早速お逃げになられたようで・・・」

「あの、お茶をもらえるかしら？」

「はい？ただいま」

侍女がお茶をとりに行くのと炯香は王室に戻った・・・

「で、どうしたの・・・葬？」

（それが押しかけ女房が・・・来た・・・と）

「ああ、花音様のことでしょう？」

（花音というのか？）

「そうらしいよ・・・葬そろそろ姿を現しなさいよ！私が一人で喋
ってる、馬鹿みたいじゃない・・・！」

（へーい）

そいうと葬が人化した

「これでいいのか？」

「うん・・・。」

「で、その女は花音というのか・・・。」

「その女ってこの国一の美女のことを……。」

「だって炆香より綺麗じゃなかったもん……。」

「私と比べては可哀想よ？私の母上は人間じゃないんだから……。」

「月翳りの兇手の子……か？」

「そうそう……。」

「あの、お茶お持ち……。はっ！誰ですかその女人は……？」

「ああ、これ？仲良くなった貴族の方……。」

（これって、おいおい、苦しいいいわけだなあ……。）

「そうでしたか……。すいません」

「いいえ……。お気になさらず……。」（ヤバイいつかばれる……。）

）

「で、帝は？」

「ああ、そこで花音様と追いかけてるよ……？」

第五章：押しかけ女房（其の二）

「あ、捕まった……。」「

「ほほほ、花音様綺麗なのにあのような方で……。でも炯香様は眉目秀麗でおしとやかなのですね……。帝がお気に入りになるわけが分かりましたわ、そちらの方も美しくていらっしゃる……。」「

（おい！さっきいつこれとか言ってなかったっけ？）

「そんなことございせんわ、貴女様も十分お美しいではないですか……。」「

「あ、脱出して……。こつち来た……。」「

「炯香 助けてー！！！」

「あ、お待ちになってー帝！」

「呼んでいるよ？炯香様……。？」

「ほっときましょう……。巻き込まれるのは嫌だわ……。」「

「では、私が……。」「

そついうと侍女が席を立てて庭へ出て行った

「いいの？ほんとに行かなくて……。？」

「いいのです、花音様の気が済むまでやらせておきましょう……。」「

「

「そうだな、では、私が行く事はないな？」

「おお、名演技だったのに何でやめちゃうの？言葉遣い」

「お前が行ってキレると困るし、な……。」「

「はぐらかしたわね！」

葬は黙殺を持ってその場をやり過ごした……。」「

キーン

「おつ神王のお出ましのようだな……。」「

「……。」「

「やあ！久しぶりだね。炯香に葬焚……。相変わらず仲が良いよう
で安心したよ。」「

「何しに来たんです？神王陛下……。」

「菟冀だよ……炆香……ここではそう言っただろうに……まあ人界での名だがね……。」

「では菟冀さん何しにきたんですか？」

「さん、は要らないよ……？」

「いい加減いたぶるのはやめてあげてくれないか……秋姫姫……。」

「いたぶるなんて……人聞きが悪いね……それに人界では菟冀だよ……葬焚？」

「……菟冀様……。」

第五章：押しかけ女房（其の三）

「だから、様は要らないよ・・・全く似たもの同士の主従だね？黒華」

「そうだな、菟冀・・・俗に言う犬は飼い主に似る・・・といったところか？」

「そうだね。今日はちよつとこの国に逃げ出した、狂魔を倒しに来たところだよ？」

「はあ、それで？」

「帰ろうとしたら炆香を見かけて、なにやら面白そうだから様子を見に来たのだよ。」

「そんな理由で！普通滅多に姿を現さない神がそれもその神たちを束ねている神王が」

「そんなふうに驚いている炆香をよそ目に自ら茶を注いで飲み始めている」

「はあ・・・君のその真面目さはいつ見ても飽きないよ・・・。」

「何を！」

菟冀は茶を飲み終わると体重を感じさせないほどすつと立ち上がった

「さて、私はそろそろ失礼しよう・・・。」

「さつさと帰ってください！」

「冷たいなあ・・・じゃあ炆香、また様子を見に来るよ・・・。」

「そういうとひらひらと手を振りながら菟冀は天へ帰っていった」

「二度と来るな！！！」

「何しに来たんだろう。あの神はいつもそうだ・・・何もないのに私のそばに来ては、花見だの、人界の茶を飲みに来ただの、意味不明なことを言いつつ天からわざわざくるなんて、仮にも神が！神王が！！！拳句の果てには面白そうだから様子を見に来ただと？いい加減にしろ」

「おいお前、不本意ながらも命の恩人だろうが・・・」

「恩人じゃない！恩神だ！！あんな奴が人であつてたまるか！！」

「！」

「怒るところはそこなんだ・・・。」

第五章：押しかけ女房（回想）

ここで少し、炯香とあの神王の昔話をしよう。

（西の国）

その国は天より抜け出して来た狂魔（狂った悪魔のこと）が沢山いたそれを狩るのが黒蝶（月翳りの兇手）そう炯香の母、薇莠の役目だった

炯香の母は縁盟界に属する半神半魔だったがその強大すぎる力と月をも翳らせる美貌のせいで人界のものからは求婚され、それが嫌だったので秋姫の母（神王）に相談したら、人界の帝を紹介してきて、「一度やってみたかったのだ、仲人を、などと言いながらかつてに婚約を結んだ」それでも必死に逃げた薇莠だが、だんだん心がその男に引かれていき最後はあきらめるように仕方ないといって婚約を受け入れ翌年に結婚。その後3年目に炯香を産み、育てた。しかし薇莠は炯香が5歳のときに何者かによって殺されてしまい炯香の父もそのとき同時に殺され、炯香は誰にも頼らず妹と二人で宮廷という地獄で生き延びていた。しかし炯香が王になってから4年の年月が過ぎたときその悪夢は起こった。なんと炯香たち王族の次に位が高い家臣が、謀反を仕掛けてきたのである。

炯香は3歳になった頃母から剣の稽古を受けていたし月翳りの兇手（黒蝶）の名を次ぐために人の殺し方も学んでいた為に一命は取り留めたが妹の香華はまだ母が死んだ頃二歳で幼かった為、学んでおらず助からなかった・・・。

そして息も絶え絶えになりながら炯香が

「母上、香華やつと、やつと貴方たちのお側に・・・私も・・・行きます」と言っていたところに、人影が現れ「師匠の子はコイツか？」と横にいる臣下に聞いている。

「はい、そうです。」

「そうか・・・そこな童子・・・お前生きたいか？」

「生きたい・・・です。」

生きたいとなぜか思ったそしてこの国を、この世界を変えるのだ、とその数秒後・・・ついに、炯香は気を失ってしまった。

「そうかならば生かしてやろう、他ならぬ師匠の頼みだ・・・この者にその気がなかったら問答無用で見捨てようかとも思ったが、そうではないらしい」

そんな声が聞こえた気がした・・・

第五章：押しかけ女房（回想）

「う、ん」

炯香が目を覚ますと全く知らない所にいた・・・

「起きたか？」

「は、はい・・・申し遅れました、私は炯香と、申します・・・王族の出なので姓はありません」

「知っているよ・・・君の姓は垂氷。私は、秋姫だよ・・・よろしく炯香。」

「秋姫様、貴女はいつたいどのようなお方ですか？」

「私？私はね・・・」

「神王陛下！！！」

「どうしたんだい？騒がしいね、怪我人の前だよ・・・？」

「申し訳ございません。」

「で、なんだい？何か用があつたのだろう？」

「あ、はい、大変なんです」

「ほう、」

「雨龍様が・・・いらつしやつたのです」

「は？なんだつて？最悪だ・・・。」

「何が最悪なのかな？我が姫よ・・・おっと今は我が妻だつたっけ？」

「うわつ、なんでもない、なんでもないからそれ以上寄るな！！！」

「ひどいねえ、いいじゃないか・・・。」

「良くない！今、お前の魔力にあてられたら、いくら黒蝶の跡継ぎでも死ぬ！」

「あの一？」

「なんだ？」

「神王とか魔力とか何を言ってるのか良くわからないのですが・・・ここ人界ですよ」

「違つよ、えーと、炯香殿、ここは秋姫の統べる天界だよ・・・な、秋姫」

秋姫が雨龍が炯香に伸ばした手を問答無用に叩いた

「だから・・・炯香に寄るな！！！」

「大丈夫、今の私は神力を強めて、少々、いや結構魔力は門の前に
おいて来たから・・・」

「その・・・私死んだんじゃないかったですか？」

「私が助けた、それが師匠の望みだったから」

「師匠とは？」

「あなたの母上のことですよ炯香殿」

「まさか、まさか母上は生きていますか？」

「いや、生きてはいない、ただその力が強すぎた為に霊として残つ
たようだ・・・無論今は寝ている」

「元気になったらあわせてやろう・・・だから今は寝なさい・・・」

「そうだよ、炯香殿。秋姫は怒ると怖いから怒られる前に寝ておい
たほうが身の為だよ」

「余計なことを！！！」

「だって本当のことだもんね？遠雷」

秋姫の横に控えていた遠雷がうんうんと頷く

「でも、雨龍のほうが怖いよね？遠雷？」

負けじと秋姫も言い返した

遠雷は黙ったままそれにもうんうんと頷いた

「まあ、とにかく寝なさい私は少々秋姫に相談があるから借りてく
よ。」そういうと雨龍は秋姫を連れて部屋を出て行ってしまった。

第五章：押しかけ女房（回想）

「天界とか、縁盟界ってなんだろう・・・なんか不思議な人たちだな・・・」

（天界は神王陛下の管理している人界で言う『国』のようなものですよ）

「だ、誰！誰がいるの？」

いきなり若い女が姿を現した

「驚かせてしまつてすいません・・・私は葬焚と申します」

「葬焚さん？」

「はい、本来この姿をしていますが大抵人界で犬の姿をとりますのでどうか、驚かないでください・・・」

「で、葬焚さん。どうして私のところに来たのですか？」

「葬でいいですよ。神王陛下の命令で本日より貴方の配下に下りました・・・なにとぞ、宜しくお願いします。」

「葬・・・私が貴方の主？」

「はい。配下になったからには、貴方様の命令しか訊きませんので、ご安心ください。」

「相手が・・・たとえば秋姫様でも・・・ですか？」

「はい。」

「では、私のことは炯香と呼んでください・・・それと一番近くに
いる存在になるのですから敬語もやめてください・・・」

「・・・ですが・・・」

「命令です。」

「うん・・・わかった。」

「葬。」

「はい？」

「あの縁盟界ってなんですか？」

「縁盟界とは正式名称・・・『縁があつたので魔界と天界の人々が

同盟を結んだ界』といって魔界の民と天界の民が文字通り一緒に暮らしている界で今は神王秋姫様の妹様である氷華様が2代目として治めている界です」

「界とは？」

「界は『国』という意味を持ちます。」

「そうですか。ありがとうございます。」

「はい。後々秋姫様からご説明があると思うので今はゆっくり寝てください……。」

「はい。」

第五章：押しかけ女房（回想）

その頃秋姫たちは・・・

「で何の用だ？雨龍！！！」

「相変わらず冷たいね・・・？」

「冷酷で有名なお前にだけは言われたくないな！」

「あの娘の妹御が冥界に間違っできてしまつて小春殿に『どうせ毎日子供の顔を見に行つてゐるんだからついでにその事も伝えてこい』と言われたから伝えにきた」

「さすが小春姉上・・・怖いなあ」

「私のほうが上位にいるのにそんな気がしないよ・・・」

コンコン 窓をフクロウがつついて少しあいているところから入ってきた

「フクロウ？めつたに来ないのに・・・」

「文を開けてみれば？」

秋姫が文を開けた

『誰が怖いって？ああ、それとそこにいる 魔王陛下に伝えてくれ少し伝えるくらいで何時間かかっているんだ？お前は道に迷ったガキか？この私に仕事全て押し付けて・・・』

斯廈殿が黒南風家当主のことで用があるらしくさつきから待っているぞ！！！！』

秋ちゃん我が妻のところで反発しなくなつたんだね・・・ふふふ返事書かないとどうなるかわかつているわよね？

椿 小春

しばし沈黙がおりた（二人とも青ざめている）

「じゃあ私は失礼するよ・・・怖い手紙も来たことだし」

「そのほうが・・・いいよ・・・うん。」

その返答を聞くと雨龍は急いで帰っていった。

数分うつむいて秋姫は机に向かい文をしたためフクロウで飛ばした。

「焔香の室」

コンコンという音がしたかと思うと、神王（秋姫）が入ってきた

「具合はもう宜しいですか？」

「はい。ありがとうございます。」

「これからのお伝えしますね。」

「・・・はい。」

「明日より焔香には、我が妹である縁明界の当主のもとで人界とは異なった武術等を学んでいただくと同時にこの界に慣れていただき、後々また人界に下っていただきます。」

「・・・はい。」

「この界は平和ですので、あまり心配はないと思いますが、葬焚をつけさせていただきました・・・もう、お会いになりましたね？」

「・・・はい。」

「貴方の妹ですが私の２番目の姉が保護したということなので、人界に下りる事はできませんが・・・ご安心ください。」

「生きているんですね？」

第五章：押しかけ女房（回想）

「いえ、もう人ではございません」

「え？」

「この界の民ということですよ。」

「会うことはありますか？」

「ええ、妹殿も貴方にお会いしたいといっている、申しております故。」

炯香と秋姫の出会いとは唐突だった。

炯香の秋姫に対する印象は変な人だけどすごい人というものだった。それと反対に今、横にいる葬焚に対しての印象は優しくていい人だった。

「炯香 け・い・かあ？」

「・・・」

「おい炯香？」

「なっなに？」

「いや。やつと花音殿が帰ったから茶でも淹れてくれないかと・・・」

「

「ああ、お茶？」そういうと横においてあった茶筒を手にとると丁寧に淹れた。

「に、苦い！なんという茶だ？」

「えーと」そっくりながら茶筒を見た

（お、おいそれ！）

「あ、甜瀏茶あ？」下に落ちていた紙を拾い上げると目を通す

「これは、天界の茶だ、良かったら飲んでくれいつも人界の茶を飲ませてもらってる礼だ。（人にはちよつと苦いかも知れぬ）」

「あんのつ神　！！！」

「神？神がどうした？」

「いいえ、なんでもない、気にしないでお湯加減を間違えちゃった

みたい淹れなおすね」

「いや、いい慣れてくるとなかなかうまい。」

「ほんと？それは良かったわ。」

「・・・・・・」

「帝大変です南ノ国のもの達が姫様を助けに参りました」

「よい。通せ、ただし敵としてではなく、私の客人として。」

「ですが帝・・・・」

「私に同じことを二度も言わせる気か？」

「いえ。申し訳ありません・・・・ただいまお通しいたします。」

第六章：迎え

数分後

奨霖たちが王室に入ってきた。

「失礼いたします。」

「お初にお目にかかります、紗代と申します。」

「どうも。」

「人の国のものをさらっておいで全く呑気な帝だな。」

「炯香を返しなさいよ！！帝だかんだか知らないけどこのろくでなし！」

「もちろんお返しする。久しぶりに昔の話が出来て楽しかったよ。炯香」

「私も楽しかったよ。穎弥。」

「あれえ？お二人知り合いなんですか？」

「ああ昔なじみでな。」

「ほんとにそれだけ？」

「琴李。人には他人に知られたくないことの二つや二つあるものだよ。」

「否定はなさらないのですね。炯香」

「紗代まで・・・そうそうこれからは南ノ国には手を出さないでいただけるといいぞ？」

「もちろん私はお前に会うために情報をききつけて手を出し」

「ああーとにかく説得しといたから。」

「さすが、炯香。」

「あ、でもお前の出かた次第だということを忘れないように。」

「はいはい。」

「私はまじめにだな・・・」

「くつくつく。痴話喧嘩はそのくらいにしておけ。」

「な、痴話喧嘩だと？ふざけるな奨霖！！！！」

「ふざけてなどいないよ？ね？琴李？」

「う、うん！」

「僕もそう思います」

「誰が見ても痴話喧嘩に見えるかと」

「言っようになつたなあ。紗代？」

「そうですか？」

「さて、私たちは帰らせてもらおう。」

「そうですね、炯香」

「え、もう？」

「長居は出来ぬ・・・」

「で、でも・・・」

「あーわかったよ、また来るからそれで勘弁して？ね？」

「むー・・・わかった。」

（子供か？）

「さよならー」

「また来るんだよな？」

「くだい。」

そのことばを最後に炯香達は暁ノ国を後にした炯香たちが南楼城についたのはもう日も傾いた頃だった・・・

第七章：仕事依頼

南楼城

「やつと着いた・・・炯香の鬼！」

「は？」

「なんで！どうして一休みもしないですつと馬なのよ！！！！お陰でお尻が痛いわ！」

「それは琴李の体力がなさすぎるから・・・」

「はいはいどーせ私は槍とか手裏剣とかしか使えませんよーだ！」

「無論いつも馬に乗っていないからだな」

「まあまあ二人とももう喧嘩はおやめなさいな」

「・・・ふんっ」

「・・・」

「私は用があるので部屋に戻らせてもらうよ・・・」

「はい。」

「あ、炯香さん今度琴を教えてくださいませんか？」

「ああ、暇なときにな。」

そう言つて手をひらひらと振りながら炯香は部屋に戻っていった

ガチャ

「やあ」

ボタン

ガチャボタンガチャリ

「なんだい？慌てて」

「何をしてるんですか貴方は！！！！」

「君の部屋でお茶をいただいていたよ、おそかったね。」

「少しは気をつけて下さい！入ってきたのが私だったから良かったものの、もしも他人だったらどうするつもりですか！！！！」

「もちろん容赦なく記憶を消させてもらうよ。かわいそうだけど・・・ふふふ。」

「そんな簡単に・・・」
「だって簡単だもん・・・そうそう天界の茶はどうだった？」
「苦いといっていた。」
「ほう人間でも飲めたか・・・」
「まあ、私にはちょうど良かったが。」
「ああ、それは君が半神半人だから・・・」
「それで今度はなんのようです？ 蒐冀」
「仕事だよ？ いつもどおりやってくれば十分だろう」
「今度のは、狂って何日目ですか？」
「二日というところかな・・・？」

第七章：仕事依頼（後書き）

もう冬ですね、季節の変わり目は風邪を引きやすいものです、私は案の定引きました・・・。

皆様もどうかお気をつけください。

更新遅くなってますいません。

よろしければ感想など、いただけますと非常に有り難く存じます。

灯籠

もう一つの用件

「用件はそれだけですか？」

「いや、そろそろ今年も酒宴を開くから招待状をね」

「ああ、これですか？」

「うん、名前を書くのを忘れてしまつて・・・」

「はあ。」

「あとくるときにお土産でキセルを買つてきてくれないか？」

「ああ、いいですよ。では斯厦さんと氷香さんと雨龍さんと桔梗さんと小春さんには何を買つていったらいいですか？」

「雨龍以外はみんな着物でいいと思う。雨龍には扇だねそれも漆黒の・・・うん。それでいいとおもつよ？」

「わかつた。」

「じゃあ私はこれで、また4日後ね？」

「はい。」

その言葉を聞き、頷くと天へ歸つていった

「おなかすいた。」

（私も同感だ）

「作るのめんどくさい。」

（神法で出せばいいじゃん！）

「あ、そっか！じゃあ早速
すうつ

「天に属せし味の神よ我が前に夕食を出したまえ。」

目の前に食べ物が出てきた

「こういう術は初めてだから美味しいか分からないけど・・・どうぞ。」

（わあ、おいしそう！）

葬が人化する

「いただきます」

「おいしい！」

「そうね」

二人はあっという間に食べてしまった

「じゃあ私は寝るわ」

「私も。」

（数時間後）

「助けてー 誰かー たすけてください・・・」

「聞こえた、葬？」

「ええ、確かに。」

「行きましよう・・・？」

「はい。」

タツタツタツ

「どうなされました？」

「人を食らうものが！・・・出たのよ！3人ほど連れて行かれたわ・

・・・」

もう一つの用件（後書き）

更新遅くなってしまつてすいませんでした。

灯籠

もう一つの用件2

「そうそう、炯香殿。」

「はい？」

「頼弥、いるだろ？」

「？はい。」

「あいつ実は私の甥だから・・・」

「え、」

「仲良くしてやってくれ。」

「？はい。」

「それでは後日・・・」

「はい。」

その言葉を聞いた後、雨龍とは思えない笑顔で帰っていった
　　次の日

「おはよう」

「おはよう紗代。」

「昨夜、出かけたでしょ？」

「ああ、うん。」

「昨日、西の国で有名だった月翳りの兇手の噂が立っていたのですが、まさか・・・」

「月翳りの兇手、ああ、あの月も翳らせるといふあの、確かその人はもうお亡くなりになられたはずですよ？」

「そうなのですか。」

「ええ、それと私今日から数日間、私用で出かけますので留守をよろしく。」

「はい。」

「では行ってきます。」

「行つてらっしゃい炯香。」

「おはよう紗代！」

「おはよう琴李！」
「朝からうるさい！二人とも。」
「あ、奨霖さん。」
「おはよう。」
「おはようございます。」
「おはよう奨霖！」
「ああ、おはよう琴李。」
「おはようございます。皆さん早いですね。」
「そうよ！炯香はまだ起きてないの？」
「また、徹夜でもしてるんじゃない？」
「いいえ。今さつき出かけましたよ？」
「……………」
「嘘でしょ？」
「私が嘘をつく理由がありますか？」
「……………すみません。」
「……………いいえ。」
「でも、炯香はどこへ行ったのですか？」
「私には、言わなかったですよ？」
「怪しいですね……………」
「私もそう思います。」
「そうか？俺は思わんが……………」
「怪しいですよ。」
「……………」

もう一つの用件2（後書き）

お久しゅうございます。

更新遅くなりまして読んでいただいている、方々には誠に申し訳なく思います。

灯籠

縁盟界の宴（前書き）

のほほんと読んでいただけると幸いです。

縁盟界の宴

「その頃の縁盟界」

「お久しぶりです。炯香」

「こちらこそ、現縁盟界王。」

「今日は、神王陛下はいらっしゃってますか？」

「姉上？うん。来てるよ、雨龍様も一緒だけど・・・」

「母上！」

「なーに？」

「穎弥兄ちゃんは今日来ないの？」

「来るよ。」

「母上この人だあれ？」

「黒蝶さんよ」

「はじめまして。2代目黒蝶の炯香と申します。以後お見知りおきを。」

「炯香こいつは見ての通り私の子だ。あとで遊んであげてくれ。」

「はい。」

「母上このお姉ちゃんも大会出るの？」

「大会？なんですかそれは・・・？」

「それは私から説明するよ・・・。」

「姉様！」

「秋姫！」

「今日酒宴の前に集まった者たちの力比べも兼ねて剣術の大会をしようと思ってね」

「私も参加可能ですか？」

「いいや炯香は手加減できないからダメだよ」

「ならば秋姫あなたがお相手してください」

「いいけど氷のほうが剣術は強いよ？」

「では私が秋姫に勝てたら勝負してください氷華」

「いいよ。」

「では後ほど・・・」

「おやちよつと遅かったね頼弥殿」

「はい？」

「なんでもないですよ」

「申遅れましたがお久方ぶりです氷華殿。始めまして秋姫殿」

「ええ、久しぶり」

「はじめまして。お前が雨龍の甥か？」

「はい。伯母上様伯父上は？」

「雨龍かそれとも権？」

「雨龍伯父上のほうです。」

「巫莠と一緒に来るよ？」

「界王陛下、神王陛下、そろそろ大会が始まります故、会場へお集まりください。」

「ああ」

「はい。」

「これから何かあるのですか？」

「ああ。剣術の大会だよ。」

「面白そうですね・・・」

「良かったら見ていくか？」

「よろしいのですか？」

「ああ。もちろん」

「席はあるよね？氷」

「はい。姉上」

縁盟界の宴（後書き）

読んで頂き、ありがとうございます。
更新が滞ってしまつてすいませんでした。
今後とも、宜しくお願いいたします。

灯籠

お土産

〔中庭〕

「これより、大会を始めたいと思う」

「勝ったものには、我らが界主であり、界一の剣の名手氷華様とお手合わせ出来ます。」

「だとよ、氷。負けたら大変だな？」

「姉上、私は私を負かしたものの末期のほうが怖いです」

「ああ、雨龍の弟ね・・・確かに。」

「私が、なにか？」

「父上！」

「権久しぶりだな」

「これはこれは儀姉上お久しぶりです」

「穎弥元気か？」

「はい伯父上」

「なぜここへ来た？権」

「だから子供に剣術の大会は見せるのは目に毒だから、迎えに来たんだよ。」

「いいじゃないたまには、ねえ」

「僕母上の手・・・」

ふごっ

「手なんだって？」

「なんでもないのよ。あなた」

「ふーん」

「さあ帰ろう、緋龍」

「ぶー・・・はい。」

「じゃあ、また後で。」

「あーあ私も出たかったなあ。」

（仕方ないだろ秋姫がだめだといったのだから）

「ちえつつまんないの」

「おやおや、これはこれは炯香」

「あ。雨龍殿」

「父上知り合い？ ふりん？」

「こらこら、何処で覚えたんだいそんな言葉」

「母上が言つてたよ？」

「秋姫か。」

「あ。父上母上を叱らないでね？」

「はいはい。わかったよ」

「申し遅れました、私は2代目黒蝶の炯香と申します。以後お見知りおきを。」

炯香がさつと何かを取り出す

「お土産です。どうぞ」

「ありがとうございます。秋姫が言つたんだね？ 全く嫌がらせは尽きないね。」

「ああ、気にしないでいいよ」

「はい。」

「では、後ほど・・・」

「バイバイ黒蝶のお姉ちゃん」

「ええ、ばいばい」

（さて次は椿様に）

「あら、炯ちゃんごきげんよう」

「椿様！」

「なあに？」

「これお土産です」

「真紅の衣・・・ありがとうございます」

「気に入っていただけましたか？」

「ええ。とても」

「小春」

「なんですか桔梗姉様」

「え」

「おお炯香殿。先日はすまなかつたね」

「いいえとんでもございません・・・それとお土産です」

「漆黒の衣か・・・気に入った、ありがとう」

「喜んでいただけ光栄です。」

「では、後ほどお礼を買いに行こうか小春」

「はい、姉上」

「すみません斯廈様は？」

「ああ、まだ来ていないよ？あの子はいつも酒宴ギリギリに来るか
ら・・・」

「そうですね、ありがとうございました。」

お土産（後書き）

お久しぶりです。

今回も読んで頂きありがとうございます。

灯籠

兄弟の黒い会話

「出店」

「あ。兄上！」

「おお樟！久しぶりだな。」

「お元気でしたか？」

「なに？あれか早く死ねとでも？」

「いいえ。とんでもない」

「ちよつと緋龍、巫莠。母上達のところに行つてなさい。」

「はい。行こつ？緋龍」

二人の姿が見えなくなつたのを見届けると雨龍が口を開いた

「で、何か話があるんだろ？」

「はい。兄上」

「ん？」

「もし、もしですよ・・・氷華を剣術大会で傷つけたものを半殺しにしてもいいですか？」

「何でそんなこと俺に聞くんのだ？」

「やー兄上ならやったことあるかな。」と

「ない。」

「きつぱりですか」

「だが、秋姫が負けたときは秋姫に稽古をつけてやった・・・。」

「そうですか（怖い）」

「お前も怖いこと言つなあ」

「いいえ。兄上には言われたくないです。」

「あはは」

「お前も稽古をつけるか、仕置きをするかにしておけ」

「はい。」（遠い目）

「さて。そろそろ酒宴だな私たちも行くか？」

「・・・・・・。」

櫛は有無を言わせない目に負けた

「・・・はい。」

（秋姫の室）

「姉上。どうしよう・・・櫛におこられる!!!」

「あはは。まさか頬に傷つけるなんて思わなかったよ。でも勝ったのねえ? ご愁傷様」

「ひどい! 冷酷! 絶対しつぺ返しがくるんだからあ!」

「人のこと心配する前に自分のこと心配しな、なんか嫌な予感がするよ。」

「そんなあ・・・!!!」

「私の勘は外れたことがないからね。」

「うつうつ・・・」

「それに私じゃ無理だよ雨龍に助けてもらうか櫛に泣きつかないと・・・。」

「だめなの! 儀兄上は助けしてくれるかもしれないけど、櫛はいくら泣いても気がおさまるまで許してくれないの!」

「ちよつとだけ・・・言つてあげるから泣かないの!」

「は・・・い。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4531c/>

黒蝶の後継

2010年10月13日03時56分発行